

仲間の連帯で誕生し、育てられた

神奈川県・郡是高分子工業労組OB・杉本 克

はじめに

私は2003年12月、35年余り勤務した会社を定年退職した。そこにあった労働組合の結成にまつわる話は、“友愛と連帯”を信条とするゼンセン労働運動の『歴史を語り継ぐ』エピソードとして、決して不足はないと思う。

組合は2008年2月に、結成40周年を迎える。それに先立って、今年8月の一斉休日を利用して、「結成40周年記念式典」が開催され、私も歴代組合長の一人として招待を受け、出席させていただいた。組合員80人程度の中小労組（結成当時は、120余人、最大時でも180人程）が、40年も存続するという事は、決して生易しいことではなかっただろう。事実、私自身も組合長時代に、合理化問題を経験した。

ゼンセン同盟の全面的支援、会社をめぐる多くの方々の協力で困難を乗り越え、会社は再建され今日に至っているものの、「あの時、仲間の雇用を守ることが出来なかった」という無念さは、リタイアした今でも心の中に、棘のように残っている。「あの時は、この方法しかなかった」と、みんなで決断したことではあったが…。

労・労の対決の始まり

前置きはこの程度にし、本題に進もう。時は、1968年（昭和43年）に遡る。日本経済は、「いざなぎ景気」の後半期でまだ活気があった頃である。そして労働運動の世界では、民主的労働運動を標榜する同盟と、マルクス・レーニン主義による階級闘争を中心とする、左翼労働運動を進めている総評の、二大勢力が激しい鏖迫り合いをしていた。

そんな時代に組合は結成された。当時、既におよそ2年近く会社内で、地下活動をしていた総評全国金属地域労組の動きを察知した職場の数人の者が、“暴力的組合が出来たら、会社を潰されかねない。職場を守ろう！”と立ち上がり、全織同盟東京都支部から独立したばかりの、全織同盟神奈川県支部の支援を得て、組合を結成した。昭和43年2月3日のことである。

それから遅れること一週間、2月10日に前述の総評全国金属品川地域支部伊勢原分会（以下、全金分会）が、公然化大会を開き、県央の小さな町（当時は伊勢原町だった）で、同盟と総評の代理戦争が始まった。後述する衝突事件は、神奈川県警の機動隊が出動したり、「会社と働く者との対決」ではなく、会社を挟んでの「働く者同士の争い」で、大騒動となり、県下でも有名な労働争議だったという。

私と組合の出会い

先に「県下でも有名な労働争議だったという」と書いた。実は私は、この現場に立ち会っていない。私はこの騒動の1ヵ月半後の、3月20日に入社した。しかし、当時会社の正門には、薄汚れ、破れかけた総評全金関係労組の赤旗が何本も立っていたり、工場の壁の至る所に、『御用組合に騙されるな！』『高分子はドレイ工場だ！』等など、会

社と全織労組を誹謗中傷したステッカーが、糊でべったりと貼られていたことは、鮮明に覚えている。現場に居なかったとは言え、その雰囲気を感じ、「職場を守ろう！」と立ち上がった全織労組に共感を覚え、その年の5月に開かれた臨時大会の議案書は、私がガリ版を切っている。その時から私は、この組合と共に歩くことを、運命付けられていたのかも知れない。

岐阜からとんぼ返り

全金分会の公然化とともに、会社と全織労組に対する攻撃は激烈を極め、それは全金分会が、会社と和解する1970年（昭和45年）5月まで続いた。毎朝正門で配られるビラには、会社と全織労組に対する誹謗中傷に満ちていた。この間まで一緒に仕事をしてきた仲間同士だったのに、である。イデオロギーの違いによる悲劇以外の何物でもない。全織労組は、職場委員会で「ビラを受け取らない」ことを決議し、組合員に周知した。しかし中には、昔からの付き合いから拒めない者も多くいた。

そして事件が起きた。分会長の出勤停止処分撤回等を要求して、2月19日からストに突入していた全金分会員とその支援者たる全金オルグ団が、2月22日19時30分頃構内に侵入し、社屋の出入口を完全占拠し、就労中の従業員の出入りを封ずる暴挙に出たのである。そして、22時過ぎに、生産ラインの心臓部ともいえるボイラーを、止めてしまったのである。

この時全織同盟は、岐阜で定期大会を開催しており、神奈川県支部の仲間を中心とする全織オルグ団も、岐阜に出かけていた。その間隙を突かれたのである。職場に残っていた執行部は、緊急執行委員会を開催し、今後の対策を検討するとともに、岐阜の全織大会会場に電報を打ち、就労中の仲間とともに分会員の乱入を防ぐべく、バリケードを築くなどしながら、じっと夜の明けるのを待っていたという。

一方、電報を受け取った全織神奈川の仲間たちは、大会を急きょ引き揚げ、夜行列車に乗って、応援に駆け戻ってくれたとのことである。縁もゆかりもない高分子を、ただ「全織同盟の仲間」ということで、夜を徹して力を貸してくれる、駆けつけてくれる、この仲間たちの連帯というものが、どんなにか心強かったことだろう。そして、この連帯は、同じく全金分会を支援する者たちにも共通するものであっただろう。

何もかもが初体験で、「労働組合ってなんだ」「全織同盟ってなんなんだ」「右だ左だと、サッパリ分からん」「総評？同盟？なおわからん」と、多くの従業員は態度を決めかねていたという。しかし、この乱闘騒ぎを目の当たりして、「常識的に見て、聞いて、また客観的に普通に見て、どっちが正しそうだ」ということを考え、全金分会の方針に疑問を抱き、全織労組への加入を決めて行ったようだ。

それから13年後の、1981年（昭和56年）同じ岐阜で開催された全織大会に出席した私は、この事件のことに思いを寄せ、次のような詩を作り、「友愛」（機関誌）に投稿した。

（友愛‘82・1号）文芸年度賞の、詩の部門で、佳作に入り、選者の江間章子さんから、「年月の重み、その意義といったものを、この詩が記録して、光を放つ感じです」と、評していただいた。

あの時
赤旗が林立する
大会会場
ひとときわ明るい壇上で
提案が続く

13年前
私たち組合の代表が
新加盟組合の一員として
この会場の壇上で
紹介を受けたという
その時
工場では
左翼グループの
工場占拠にあい
混乱の極に
達していたという
そのため
神奈川の仲間は
大会会場から
急遽引き返し
私たち組合を
守ってくれたという

13年たった今
そんな実体験のない
自分が
代議員として
同じ会場にいる
そこには
積み重ねられた
時間という名の空間が
横たわっている

でも
あの時
仲間に助けってもらったという
感謝の気持ちを
私たちは
誰一人として
忘れてはいない
先輩たちの
あの時の苦労を
しのびながら
本部提案に
聞き入る

これからも歴史を刻み続けて

こうして仲間の友愛と連帯に守られて誕生した組合は、その後も、いつもゼンセンの仲間に支えられ、またゼンセンの仲間と連帯しながら、今日を迎えている。

因みに、当時結成された全金分会は、会社と和解の後、組合員一人だけが残り、その組合員が2005年（平成17年）6月定年退職して、消滅した。

40周年を迎えるにあたって、結成当時支援をしてくれた、仲間の中小労組の多くが現在は存在していない、という現実を前に、このように数奇な運命を背負って結成され、歩み続けている組合に、私は次のように思いを綴った。

歴史を刻み続けること
～ 労組結成四十周年に寄せて ～

手元に
ファイルされたビラの束がある
それは埃臭く赤茶けていたり
文字が消えかかっていたり
端の方がボロボロになっていたり
悠久の時間が横たわっている

当時の先人たちが
毎日毎日ガリ刷をして
仲間に手渡し
理解を求め 賛同を得ようと
血の滲む思いをして来た活動の証

主義主張を異にする別のグループも
負けじとビラを配っていた
それも手元にある
同じように赤茶けた姿で

働く者の幸せを求めることに
違いはなかったのに
お互いに
自分たちの主張の正しさを信じて
誹謗中傷し合い
不幸な時間を費やして来た

そして四十年という歳月が流れた
先人たちの全員が現役を退き
当時のことを少し記憶に止めている
私たち世代も
同様に現役を退いた

今
若い指導者たちが
四十年の歴史を振り返り
新しい時代を切り拓こうとしている

当時対立していた二つの組織

その一方は消え
もう一つが
このように歴史を刻み続けている
そのことをもって
「自分たちが正しかったからだ」
などと単純には思えない

大きく時代が変化している今
この時代を乗り越えて
生き続け
五十年、六十年と
歴史を刻み続けていくことが
「正しさ」の真の証明となる

(2007年10月)